

氏名	MORRISON, Lindsay Ray
学位の種類	博士(学術)
学位記番号	甲 第199号
学位授与年月日	2017年6月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	古代日本における「ふるさと」意識の系譜 —日本人の原風景の形成と変容をたどる— (The Notion of 'Furusato' in Ancient Japan: Formation and Transformation of the Archetypal Landscape)
論文審査委員	主査 教授 生駒 夏美 副査 元教授 遠藤 織枝 (文教大学) 副査 教授 ツベタナ I. クリステワ 副査 教授 小島 康敬

---

## 論文内容の要旨

本論文は「ふるさと」意識の形成と変容を古代日本の文化表象を資料として辿ろうとするものである。「ふるさと」と言えば、特定の場所というよりは、日本人であれば誰もが心に抱く心象風景となっており、牧歌的な里山風景という共通性を持つ。しかし、このようなふるさと観はどこから来たものなのだろうか。国民的アイデンティティと強く結びついたふるさと観の源流を多くの論者は近代に見る。すなわち、外国の影響下にあつて近代国家日本が形成される際に、国家アイデンティティの一つの要素としてふるさと観が形成されたとするものである。しかし、「ふるさと」という言葉は近代以前からある。元々の「ふるさと」とはどのようなものであつたのだろうか。またその「ふるさと」は近現代の「ふるさと」と本当に無関係でありうるのだろうか。そのような疑問に立つて本論は古代の神話伝説に遡って「ふるさと」を探求する。

第一章は『古事記』(712年)と『日本書紀』(720年)における「ふるさと」を考察する。これらの書物に「ふるさと」の語は登場しないが、『古事記』には「妣の国」という概念が登場し、近代の民俗学者はこれを日本人の「魂のふるさと」と論じてきた。しかし本論ではアブジェクション論を援用してこれを批判し、「妣の国」が憧憬されるだけの場所ではなく、おぞましさを孕む棄却された母の居場所であると論じる。「妣の国」は

地下あるいは海の底などの異界として想像され、そこへ行くことは危険でありまた恐怖をもたらす。失われた母を求める息子は「妣の国」へ行くことを父によって強く禁じられる。現世が父の権威や法で支配されるのと対照的に、「妣の国」は無秩序と喪失あるいは死を内包する。ヤマトタケルの伝承においては、彼が父から半ば追放される形で辺境を彷徨うが、彼が偲んだ大和国は「父の国」であり、「妣の国」と対照的である。このような「妣の国」論は、近現代の「ふるさと」が失われた母のイメージと強固に結ばれていることを考えると重要な手がかりである。

第二章では、日本最古の歌集『万葉集』(8世紀頃)を材にとり、「ふるさと」あるいは「ふりにしさと」の語が喚起する意味やイメージを分析する。もっぱらこれらの語は時の経過により古くなった旧都を意味し、遷都によって「ふるさと」が生まれ、歌に詠まれていった事実を示す。しかしそこで多くの歌において寂れていく旧都に残され、ふるさとの情景となって詠われるのは女性であることに本論は注目し、前章で論じた「妣の国」との連関を見る。また防人歌においては男性である詠者が、郷里に残してきた母や妻を歌に詠んだが、これも「ふるさと」観を女性と結ぶことに貢献している。

第三章では三代集と呼ばれる三つの勅撰和歌集『古今和歌集』(905年)、『後撰和歌集』(950年代)、『拾遺和歌集』(1005年)で詠まれた「ふるさと」あるいは「ふりにしさと」を分析する。人々の過去意識が深まるこの時代に「ふるさと」は広がりを見せ、旧都のみならず個人的記憶の場所と一層結び付けられる。これらの歌集においても女性と「ふるさと」の結びつきは続き、また「ふるさと」と花の組み合わせが多くなるが、そこでは花は美しいばかりの存在ではなく、死滅や腐敗といったイメージを喚起させる。ここでも「妣の国」同様のアブジェクションが見られ、両義的な女性イメージが「ふるさと」と接続される。

最終章ではこの論文が「ふるさと」の歴史的変遷を追う筆者のプロジェクトの基盤となる研究であることが記され、今後の研究の展望が述べられている。

## 論文審査結果の要旨

2017年5月16日15:10より、国際基督教大学教育研究棟1-257にて、Lindsay Ray MORRISONさんの博士論文審査が、生駒夏美教授、遠藤織枝元教授(文教大学)、Tzvetana Kristeva教授、小島康敬教授の四名で構成される審査委員会によって開かれた。審査は公開され、審査委員以外に数名の大学院生や教員が参加した。審査は冒頭Morrisonさんから研究成果についての要約と、中間審査の指摘に対し、どのような改善がされたかの説明がされた。続いて、審査委員による講評と質問が提示された。

2017年2月27日に行われた中間審査では、以下のような指摘がなされた。第一に論文を貫く論理の強度が弱いこと。随所で鋭い分析が行われているのにも拘らず、それらを結ぶ線が明確にされておらず、全体的に弱い印象を与えてしまう点への改善が求められた。次に和歌の分析の深化が求められた。一般的な解釈に留めておくのではなく、筆者の独自の視点を活かした解釈を盛り込むことが提案された。次に構成の修正と、追加で考察すべき資料が指摘された。

2017年5月16日の審査において、審査委員会はこれら中間審査で指摘された課題が、最終版において大いに改善されているという点で合意した。特に全体をまとめる論旨が明確化され、博士論文に相応しい強度を持つ学術論文となっていることが高く評価された。一方、さらなる改善点や今後の研究の展望について、各審査委員から意見が出された。まず外部審査員である遠藤元教授は万葉仮名の読み方について、より詳細な検討が必要と指摘した。また「故郷に錦を飾る」という慣用句について、初出がこの論文の研究対象である時代よりもずっと後の17世紀頃である可能性を指摘し、平安時代の人々がこのような意識を持っていたかについてより綿密に検証する必要性を指摘した。また「妣の国」がおぞましいだけの存在であったのではないが、本論ではどちらかというとおぞましさに焦点が当たっている印象を受けるので、多義性をより強調すると良いのではないかとの指摘がなされた。

クリステワ教授は、この論文が扱った「妣の国」が異界としてイメージされていることから、『竹取物語』などの説話を今後の分析に加えると良いとの指摘があった。またいくつかの用語の不適切な使用が指摘され改善が求められた。故郷という中国由来の言葉が、時の経過を強調する「ふりにしさと」「ふるさと」（としを經る里）となる過程は和語化の過程であり、平安期に日本なりの文化表現が発展したことを示しているのので、これを考慮に入れるようにと要望が出された。資料についてはなぜこれらを用いるのか、根拠を明確にした方が良いとの指摘がなされ、まとめの部分で現代までの研究のつながりを示唆する広がりを出すようにと要望が出された。

小島教授は、重複が多いために流れが掴みにくくなっているのとの指摘がなされ、今後出版する際にはより簡潔にするようにとの指摘がなされた。また比較の視点をより多く取り入れて行くことが今後の展望としてありうるのではないかとのコメントがされた。ふるさとが歴史的に意味を持つのは幕藩体制が整備されお国意識が高まる江戸時代であるので、今後、そういった歴史の流れを踏まえて研究を進めるようにとのコメントがされた。

生駒教授は、他の審査委員同様に中間審査からの大幅な改善を評価し、特に第一章の完成度の高さを高く評価した。アブジェクション論も有効利用され、母の出産する身体と「妣」の死のイメージの結びつきが説得力を持って論じられていると評した。一方で、

ヤマトタケルの「白鳥」のファルス性についても分析に盛り込むことが可能であったのではないかと指摘した。また所々、言葉の使用が曖昧であることが指摘され、ヤマトタケルについては「敗北者の郷愁」との語を使用しているが、内容が曖昧である点、防人歌については「リアリズムが際立つ」の内容が曖昧である点が指摘され、改善が求められた。また山について、峻厳な山脈という父的表象から、近現代に至ると牧歌的丘陵という母的表象に移行する点が指摘され、今後の研究にロマン主義的な分析を含めると良いと示唆された。「鄙」が「荒ぶる神」と結び付けられているという論点については、今後より発展させていくようにとの指導がされた。

上記、様々な指摘や改善点が挙げられ議論された。これらの指摘に対し、Morrisonさんからは論文の出版に向けて改善に取り組む旨と、今後の研究の進展の上で取り組む意思が示された。

審査は15:10より16:40まで行われ、その後審査委員会による協議が行われた。審査委員会は本論文が日本における「ふるさと」観の成り立ちの学術的研究領域にオリジナルな貢献をするだけの質に到達しており、著者は研究者としての活躍を期待できる十分な学術的見識と研究能力を有していることを確認し、全員一致で博士学位を授与するに値するとの結論に至った。